

---

# 恋愛対象 腐れ縁

紫乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛対象 腐れ縁

### 【Zコード】

Z2732BA

### 【作者名】

紫乃

### 【あらすじ】

幼馴染の高校生の今までとこれからのお話。

一晩一睡もできなかつた。理由はとっくに分かつてゐる。ただ認めたくないだけ。思い出すのはあいつの顔。もういい加減に寝させてください…。

お題配布サイト「負け戦」様より【24時間を追いかける10の題】

拝借させていただきました。

## 最悪の目覚め

室内を照らす明るい朝日

お気に入りのモスグリーンのカーテン越しに、スズメの声がする。おそれおそれ手を伸ばした先の田舎まし時計は、無情にも7時を指している。

もう起きなければいけない時間だ。

全く眠れなかつた。

自分の身体が思うように動かない。

痺れたように身体が動く」とを拒否しているようだ。

「…………つあああ～」

無駄だとわかつていても枕に顔を押し付けて、はるか遠くに行つてしまつたらしい眠気を探す。

階下から母が起きなさいって叫んでる。

ほんとにもうギリギリだ。

諦めて重い頭を振つて起き上がつた。

「おはよー、お母さん」

「はい、おはよう。なにその顔」

顔を見た母が思いつきり顔を顰めた。

「……ひどい？」

「ひどい。顔洗ってきなさい。少しはましにならせて」

言葉は厳しいけど、ひどく心配そうに洗面所に向かう私を見ている。大丈夫だと軽く手を振って、洗面所に入れば、父がいた。

「おはよう、お父さん」

「ん。おはよー」

父は軽く眉をひそめたが特に何も言つてこなかつた。

鏡に映つた自分の顔は、寝不足で充血した目と、腫れた瞼。プラス、寝起きのぼさぼさ髪。

一応女の子のつもりでしたが、これは……ひどい。

「ありやー……」

冷水にして顔を洗うと、幾分さっぱりした。

「圭ちゃん、これ、目に当てなさい。学校には車で送つて行つてあげるから」

母が洗面所に温かいタオルを持ってきた。

目に押し当てるど、じんわりと温かさが伝わってきて、

「……今なら、疲れそう」

「なんだ、寝不足か？」

父の幾分ほつとしたような響きの声に苦笑する。

寝不足……確かに寝不足だ。だって、一睡もしていない。

母の車で学校に向かつ。

学校に近づくほど、グレーのブレザー、青と黒のチョックのパンツ

かスカートの制服が増えてくる。

自然と重いため息がもれて、運転席の母が横目で私を見ているのが分かった。

行きたくないわけじゃない。

行けば友達もいるし、部活も楽しいし、いじめがあるわけじゃない。

ただ、昨日の寝不足の原因が学校にあるのだ。  
はつきりとわかってる。

容姿端麗、頭脳明晰、ついでにバスケで全国大会に行っちゃうような運動神経。

幼なじみは完璧人間です。

時期生徒会長は彼だつてもっぱらの噂です。

でも現生徒会長である私の兄はちょっと渋い顔してる。

あいつが入学するまでは俺が一番だつたって言つてたのを聞いたことがあります。

私の兄も、すぐカッコイイ。これは認める。ついでに頭もいい。  
学年トップ。

そんで、私……平凡な一般市民です。

完璧な兄と幼馴染を持つたせいで、私は平凡なのに有名だ。いや、平凡なことが有名だ。

だから私は日々隠れるように、あんまり目立たないよう生きていた。

そんな私に突如課せられた昨日の試練。

なんで放課後まっすぐ帰らないで図書室なんかに行ってしまったのか。

今思えば突っ込みどころ満載の思考回路。

思い出すだけでためいきが出る。

母の車を降りて校門をくぐる。

昨日のことは私とあいつしか知らない出来事のはず。あいつが言いまわっていなけれが噂になんてなりつこないのに、少し周りの目が気になる。

「圭、おはよう」

教室までもう少しというところで、よく知つていて、できればちょっと近づきたくなかった声がした。

職員室に日誌を取りに行つていたようで、黒い表紙の日誌をぶらぶらさせて近づいてくる。

心臓が破裂しそうに脈打つて、息が詰まった。今まで彼を見てこんなに苦しくなることはなかった。

「お、おはよう唯斗」

彼、唯斗の細い腕が、偶然とはいえ私を助けてくれて、一瞬だけ……抱きしめられた。

昨日の図書室で、足台から滑り落ちた私の下敷きにしてしまったのだ。

「おまえ、昨日怪我なかつたか?」

「……大丈夫」

ああ、唯斗と話すのってどうやるんだっけ。

昨日いっぱい考えて、考えすぎてわかんなくなつた。

ただただ、間近で見たまつ毛の長さとか、薄い唇とか。

思い出すのはそんなことばかりで、気づけば朝だった。

今まで何にも感じなかつたのに、意識すれば止まらない。

今朝、改めて気づいてしまつた。

私は、唯斗が好きだ。

「つてか、おまえ重いな。少しは痩せれば？」

……前言撤回

女の敵め！――！

## 朝の占い

テレビでやつてる朝の占いでその日のテレシヨン占いがかかるつてくれる。

そう思うのは私だけじゃないよね？

だいたい1位から順番に発表していく、8位くらいここまで自分の星座がない時は慌ててチャンネルを変えちゃう……

ワーストってなんだか一日中重い気持ちを背負つてるみたい。逆に1位つですごく嬉しい。

その日のラッキーアイテムでも、ラッキープレイスでも信じたくなつてくれる。

この日の私は、占い以外でもしゃがみつかり浮き沈みしてる。

原因？

認めたくないけど……

「昨日、八代が3組の伊藤さんと山田とれたつて

思わずフリーズ

「断つたらじいよ」

私の反応を楽しむみたいに一緒に弁当を食べていた朱里がにやりと笑った。

「あなたたちって、どうなってるの」

「どうも。むしろあいつのこと本当に好きなのかわからなくなつてくんな」

幼馴染つて難しい。

恋愛感情なのか家族愛的なものなのか。

好きは好きよ。

ただ、自信はない。

あいつが他の女の子と一緒にいるのを見たるすると、面白くないつて思うし。

ただ、弟みたいな兄みたいな存在が溢られちゃうつうの。あの日の図書室以来、まともに話してもいい。

「……ま、男は八代だけじゃないしね」

「そうだね」

噂をすれば、教室内が一気に華やかな声に包まれた。目をやれば案の定取り巻きを連れたあいつの姿。そつと目を外した。

「圭」

背後から急に声をかけられて思わずびくつとしてしまつた。振り返ればにやにやと笑つ兄がいた。

「お兄ちやん？ めずらしひね、2年の教室に来るなんて」

私と兄はよく似ている。

まっすぐの黒髪に、大きな瞳。  
やや病弱そうに見える白い肌。

「いや、ちょっと世に頼みがあるんだ」

「？ なに？」

放課後に待ち合わせることにして兄は去つて行つた。  
なんだらか、嫌な予感がする。

「光哉先輩相変わらずかっこいいねえ」

「でしょ」つへ。

「あんたお兄ちやん好きね」

「うん、有名すぎて迷惑だけどね、優しいもん」

朱里が大きなため息をついた。

「お兄さん以上にカッコイイって思える人いるの」

「……きっと、いや、同じくらいで唯斗」

あんたしじゃくは彼氏できないよ。

ハードルが高すぎる。

朱里の意見に頷く。

私もそう思っています。

「ひそり盗み見れば、ちょいとひたちを向いた唯斗と田があつた。田を組めて、小さく笑うと、周りに断つてこひたちに歩いてくる。いきなりのことにびっくりしてあいつを見つめるしかできなかつた。

「ん、これ好きだろ?」

机に置かれたのは私の好きな甘い菓子パン

「あ、ありがと!」

わざわざ黙つてきてくれたのか。  
わざわざまでりよつとわわついていた心が温かくなつた。

「肥えたら彼氏はできねえだ?」

「じゃあよ!すくなよ!~!

なんなの、こいつ、あつえない。

ぬるい笑顔を張り付けて何やら頷く朱里をぞつとくくなつた……

悔しいけど

あいつの言動に



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2732ba/>

---

恋愛対象 腐れ縁

2012年1月8日22時45分発行